

初等音楽科教育における「音楽づくり」の研究  
～創造的音楽学習に基づく新たな授業計画の構築～

教育内容・方法開発専攻

文化表現系教育コース

M11184E

守山 繭子

## 1. 研究の動機と目的

音楽科教育において児童たちが最も学習する機会が少ないのが創作活動である。その原因は様々あるが、一番の原因は必要とされる知識が非常に専門的であると考えられていることが挙げられる。90年代にその考えを一新する授業形態が現れ、一大ムーブメントとなった。それが創造的音楽学習である。しかし、創造的音楽学習は誰でも取り組めるという発想から、その論理が体系的に整理される前に実践のみが乱発されるという現象が起こってしまった。その結果として教育現場では大きな混乱が生じ、創造的音楽学習を基にした創作活動を学習活動に取り入れることを躊躇するようになっていった。音楽の専門的な知識が無い、児童たちに気軽に楽しんで創作活動を行わせることができ、さらにはその音楽経験から音楽的な基礎的諸能力を身につけさせることができる、という創造的音楽学習の本来の価値を十分に発揮する前に創造的音楽学習は失敗とされてしまったのである。

しかし、創造的音楽学習は平成20年改訂の学習指導要領において「音楽づくり」として多少の改訂がなされたものの、その理念は今も受け継がれている。

本研究では「音楽づくり」における学習内容の可能性を探り、その可能性を十分に発揮できる授業実践モデルを提示する。創作活動に対する専門的な知識が無ければ、

なかなか学習活動に創作活動を取り入れにくいという一般的な意識を払拭し、多くの児童が取り組めるような音楽科における創作活動の一例としたい。

## 2. 論文の構成

はじめに

### 第I章 創造的音楽学習の歴史

第1節 創造的音楽学習の導入・展開

第2節 学習指導要領における「創作活動・音楽づくり」の変遷

第3節 創造的音楽学習の評価について

第4節 イギリスにおける創作活動のカリキュラム

### 第II章 創造的音楽学習の授業実践

第1節 イギリスにおける創造的音楽学習の教育実践

第2節 平成元年以降における指導展開例

第3節 平成20年以降における指導展開例

### 第III章 新たな授業実践モデルの提示

第1節 低学年における授業実践モデル

第2節 中学年における授業実践モデル

第3節 高学年における授業実践モデル

おわりに

### 3. 研究の概要

本研究において、まずは創造的音楽学習が日本に導入された経緯やその理念がいかにして教育現場に広がっていったか、学習指導要領への影響、そして「つくって表現する」から「音楽づくり」への文言の変更など、日本における創造的音楽学習の歴史的な変遷を様々な観点から整理した。

そして、その変遷から小学校の音楽科教育における創作活動（音楽づくり）の現状と問題点を挙げた。

また、創造的音楽学習が学習指導要領に取り入れられた平成元年以降の学習計画と「音楽づくり」と名称・内容が変更された平成20年以降の指導計画例を考察し、着眼点をあげ、それに対する筆者の考察を行う。

それらの着眼点を基に筆者なりの授業プランを作成し、筆者が考える現在の音楽科教育における音楽づくりの位置と内容を明確にしていく。

### 4. まとめと今後の課題

筆者は、音楽づくりでは「児童が思考過程を経て行う創作活動」と考えている。しかし、それは児童に何の知識も与えずに児童のしたいようにさせることでは無い。

題材に合った創作ができるように、教師が児童に必要な知識を教授することは必須であると考えている。音楽づくりでは、この指導をどの程度まで行うかが非常に難しい点である。指導を全く行わないと秩序の無い音の羅列を音楽と言わざるを得なくなり、指導を行えばと、児童から音楽づくりへの意欲を削いでしまうことになるのであ

る。

このようなことに配慮しながら、本論文の第Ⅲ章において、授業実践モデルを低学年・中学年・高学年と作成した。

しかし、これらの授業実践モデルを実践できていないため、実際の児童の発達段階に則しているのか、児童の意欲や集中を切らさずに授業を行うことができるのか、また筆者が予想したような児童の反応が見られるのか、といった多くの疑問と課題を残す形になっている。

そして、授業時数についても現在の小学校における教育過程において音楽科の授業時間数は週に約1.5時間であり、授業実践モデルに示したような授業時間が取れるのか、といった実質的な課題も残っている。

筆者はこれらの課題や問題点をそのまま残すのではなく、教職に就き実践を重ねる中でそれらの答えを導き出していきたいと考えている。

小学校は6年間という長い時間をかけて児童の学習を支援していくことができる。その長い期間を使って、音楽的な基礎的能力を育むのが音楽づくりであると考えている。よって、本論文で提示した音楽づくりの有効性を用いた授業展開を行い、一人でも多くの児童に音楽における創作表現の楽しさを伝えていけるように研鑽を積みたいと考える。

主任指導教員 草野次郎